

ると言わなければならない。ユマニストたちが、女性には悪魔的生物がいるので悪を犯さないようにするため、無知の状態に留めておかなければならないとするアンチ・フェミニズムと全く断絶していることは確かである。しかし、彼らにとっては、宗教改革者たちにとってと同様、女性教育は結婚と夫に向かわなければならない。少女の教育は、結婚において必須である徳への適合に限定される。花嫁はその文学的、道徳的、宗教的形成をその夫に負っている。

エヴリーヌ・ベリオ・サルヴァドールによれば、ユマニストの教育は二重の目的を追求しているように思われる。つまり、女性が家族を守る柱となることと、「学識」ある女性が服従に同意する当事者となることである。「ブルジョワ」家庭が栄えると、家庭の価値が増し、この家庭をよく治めることが必要となり、女性の教養の水準を全体的に発展させる。

女性の自発的協力によって、結婚の階級制度的土台、宗教的、政治的秩序の象徴を強固にすることに関わってくる。女性を有徳な花嫁、家族の母親の役割を果たすようにに養成しなければならない。この理想は、ユマニストたち、プロテスタントたちが女性教育のために提案し、やがて、カトリックの改革者たちが提案することになるものをすべて基礎付けている。

愛と知識

ルネッサンス期のネオ・プラトニアンは女性教育の問題を違った視点から取り組んでいる。彼らの対象は結婚ではなく、愛である。『プラトンの「饗宴」注解』において、マルシヨ・フィチノ³⁵⁾はプラトンに続いて、愛における知的機能の重要性をすでに主張していた。愛は美の願望である。この美は「ただ知性と視覚と聴覚に所属している。」³⁶⁾「この三つの能力」、とりわけ、私達に精神の美を認識することを可能にする知性により、人間は肉体的美から離れ、神的美に達することがで

きる。精神の美は見ること、あるいは、聴くことによって知覚される身体、あるいは、声の美よりも優れており、フィチノは愛と知的認識との結びつきを打ち立てたとしても、それを女性には適用しなかった。フィチノから靈感を受け、しかし、彼のプラトンの愛を男女間の愛に限定して、文学において、女性のために愛の主題、知識の源泉を導入したのは、社交界の著者たちである。ネオ・プラトニックの靈感を受け、フランス文学のなかで例として二つの作品を取り上げよう。架空であれ、現実的であれ、女性の口により女性の表現されているという事実により、その主題が明白である。その二作品とは、アントワヌ・エロエの『完全な男友だち』³⁷⁾とペルネット・デュ・ギユエの『韻律』³⁸⁾である。

『愛について』において、フィチノはプラトンの説に同意して、年下と年上の二人の恋人の間で交わされる「美の交換」を描いていた。後者は「年下の恋人」の身体的美を目で楽しみ、前者はより経験豊かな恋人との親密さにより「知的美」を獲得する。一方は教え、他方は学ぶ。エロエとペルネット・デュ・ギユエが性の異なった恋人たちに適用して、展開しているのは、年下の恋人が年上の恋人により知的に形成されるというこの原理である。年上の恋人は、もちろん、男友だちであり、年下の（そして、最も美しい）恋人は女友だちである。

アントワヌ・エロエとペルネット・デュ・ギユエは、愛と徳と知識の間の密接な結びつきを打ち立てた。女流詩人、ギユエによると、

「知識は徳に仕え、
徳によって不品行な愛は打たれ、
徳は愛を正す。」³⁹⁾

知識によって支えられた徳は「不品行な」（俗な、あるいは、地上的な）愛を真の愛に変える。—フィチノによれば、神へ昇る第一歩である。『完全な女友達』におけるこの変化は全く男友だちによる。彼らの愛の初期において、彼女の感覚は

35) Marsillo FITINO (1433-1499) イタリアのユマニスト。プラトン主義の哲学者。FICIN, *Commentaire sur le Banquet de Platon*, Les Belles Lettres, 1978.

36) *Ibid.*, p. 142.

37) Antoine HÉROËT, *La Parfaicte Amye*

38) Pernette du GUILLET, *Rymes*, Genève, Droz, 1968

39) *Ibid.*, p. 74.